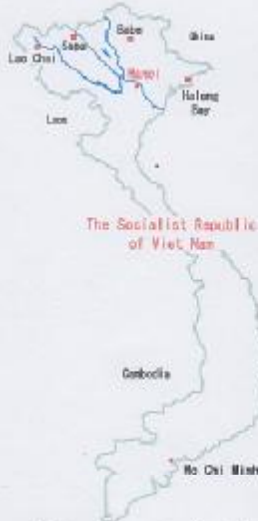


北部ベトナム・サパ、「黒タイ族」の藍染め綿布

Duong thi Thanh (ズンティ・ティン)、吉澤岳史



中国雲南省やラオスに国境を接する北ベトナム一帯は、様々な少数民族たちの文化が交錯する人種のるつぼである。その中の小さな町・サパSapaはホアンリエン山脈の中に位置し、ベトナム最高峰のファンシパン山を間近に望む風光明媚な避暑地の町である。週末には色とりどりの衣装に身を包んだ様々な少数民族が、町の市場に集まってくるのを見ることができる。世界的にみてあらゆる民族の生活様式が現代化し、伝統的様式を放棄するケースが多々見られる中、ここサパでは少数民族たちの伝統的な生活文化が今も日常に息づいている。

黒タイ族Black Tayの村・バンホーBan hoは、サパの町からジープやバイクで一時間ほど溪谷の坂道を下った先にある。途中小川を挟んで黒モン族・赤ザオ族・ザイ族らの村が点在し、彼らの作る棚田が延々と重なっている。バンホー村は溪谷の中で他の支流が流れ込む合流点にあり、比較的広くて肥沃な盆地に豊かな稲田の風景が広がっている。タイ族の家は高床式である。主に生活の場所は

2階になっており、一階は台所、作業場、農具や薪などの倉庫になっている。この地域のほかの緒民族と比べて、家の中は整頓され清潔感が漂っている。この大きな家の造りの精巧さなどからも、かれらの勤勉さが伺える。

黒タイ族はTay-Thai語族に属し、タイランド王国をはじめとしたインドシナ半島の国々に広く分布する他のタイ族グループと祖先を同じくする。もともと8世紀ごろ中国南西部に居住していたが、11～12世紀ごろから南に移動を開始。13世紀ごろにはマレー半島にまでにその分布が及んだと言われる。タイ族の衣装様式には地域ごとに様々な差異が見られるが、長い移民生活と歴史を翻弄される中、民族を超えた複雑な影響関係が生じたことを推測できる。



この村のタイ族女性は現在通常にはアオザイの代わりにTシャツとキン族風の薄地木綿製シャツ（アオババ）を着用し、サテンの黒いズボンを穿き、頭部には市場で買った中国製ポリエステル毛糸で作った格子模様の布を巻いている。特別な日や、大切な来客があるときには、上着を濃藍に染めた木綿で作ったタイ族の伝統的アオザイに着替える。老人と子供を除いて男性はほぼ現代的な服装を着用しているが、女性同様特別な日には濃藍の木綿製シャツとズボンに着替える。これら衣装の作り手はもちろん女性である。

藍染めした木綿は衣装以外にも蒲団表・蚊帳・間仕切りカーテンなどにも使用される。糸染めしたもので格子模様仕上げた生地に、市場で仕入れたカラフルな花柄生地をパッチワークで縫い付ける。婚礼の際にはとこの家族はこれらを少しずつ事前に準備し、嫁ぐ日に備える。これらの出来不出来が嫁の価値を決める基準にもなり、全ての材料や過程で慎重な仕事を行う。

彼らの生活は四季のサイクルに従ったもので、非常に合理的といえる。染織はおもに農閑期に行われるが、その材料となる藍や綿花の植え付けや収穫が、稲のそれとずれていることは注目に値する。また藍染めが行われない時期は、染織に必要な草木が生えていない。

- 2・3月 綿の種を植える。
- 3月 綿花の綿打ち。柔らかくなった綿は9月まで保管する。
- 4～6月 田植え。
- 7月 綿花の摘み取り。
- 7～8月 藍の木を植える。
- 8月中旬～9月中旬 前年に植えた藍葉の収穫と藍泥作り。
- 9～10月 糸作り。
- 10月 稲刈り。
- 10月末～2月中旬 藍染めと機織。

木綿布の作成

木綿は一年生の木で高さ80cm。2～3月に種を植えつけ、7月に刈り取る。綿花の房はほぼゴルフボール大。かなりの確立で綿花の中に丸々と太った毛虫がいるが、これは他にもなくこの綿花が無農薬で育てられたことを意味する。この綿花はこのまま翌年の3月まで保管される。

翌年春、手作りの木製「綿繰り器」で綿と種を分ける。ハンドルを回すと上下に合わさった2本のネジ状に溝が切られた棒が回転し、その間に殻を取り去った綿花を入れる。するとこの装置の手前に種が落ち、反対側から綿が出てくる。綿が湿っていると種が挟まってしまうので、その場合はいろいろの火で温めて乾燥させる。種は後に植えられることになるが、絞り染めを作る際には豆絞りの中にも使用される。

つぎにこの綿を「綿打ち」してほぐす。長さ約80cmの木製弓にはナイロン製の弦が張られていて、これに少しずつ綿を絡ませて竹筒で弾く。すると綿の塊は解れて一瞬空中に漂い、それが床に敷かれたゴザに舞い落ちる。竹には切れ込みが入っていて、弓を弾くときは連続した調子で乾いた音を立てる。一見簡単そうに見えるが、弦に絡ませる量を間違えると弦に綿が絡み付いてなかなか取れない。この綿は潰れないように袋に入れ、このまま9月まで保管する。



9月。糸つむぎにはまず綿を幅10cm長さ15cm厚さ1cmほどに台の上に広げ、それを一本の箸に巻いて円筒状にする。糸車を用いてこれを細い糸に繕って行く。この糸は強度を持たせるため米のとぎ汁で煮て天日で乾かす。さらにその糸をもう一度糸車に掛け、均一の太さにする。この工程は他の民族に限らず他の地域の同じタイ族にも見られない。この村の生地が機械織のように薄くて均一な薄さに仕上がっているのはこのためである。これを細い竹筒に巻き取り、保管する。この周辺はベトナム

の中でも降雨量が多い場所だが、綿繰りや綿打ちが行われる3月、糸が紡がれる9月はそれぞれ空気が乾燥しているため、綿を乾燥させて作業するのに適している。又この時期は様々な木製機織道具が乾燥して木が縮み、細かな調節が利かないため織機が使えない。

10月末、稲の収穫が終わるのを待って機織を始める。まず手回し式の巻き取り器を使用して、糸を20本の竹筒に巻いていく。それを四角い木製枠にはめる。これは経糸を一度に20本引き出すための整経作業装置である。



整経作業は高床式住居の床下の柱を利用する。この木杵を二人の女性が担ぎ、二本の柱を往復しながら一度に20本の糸を柱に巻き取っていく。縦糸に必要な長さ(約15m)と生地幅(約38cm)に必要な本数を整えながら、慎重に巻き取っていく。糸が絡まないよう竹の棒で叩いて糸をほぐし、これを木の葉あるいは新聞紙を挟みながら「経巻き」に巻き取る。巻き終わると直径は約50cmほどになる。これを2本の綜絢・そうこうに一本ずつ交互に通していく。これは横糸を通す杼口・ひぐちをつくるために、縦糸を引き上げるための仕掛けである。これを織機にセットする。つづいて織機に付けられた箴・おさに経糸を一本ずつ通していく。これは薄い竹片を楕円に列ねて作り木製の框・わくに入れたもので、縦糸をその目に通して整え、横糸を通すたびにこれを圧して、布の織り目を密にするために用いる。これで織るための準備が整った。生地の厚さにもよるが、30グラムの綿花から幅38cmの生地を約2m織ることができる。この村で使用される高機は、織に入る前準備さえ慎重に行えば、比較的容易に平織りの生地を織ることが出来る。最近では周辺に居住する黒モン族なども、品質が均一に作れない伝統的な腰機をやめ、高機を利用するようになってきている。



藍染め

この村では琉球藍(ゴマノハグサ目・キツネノマゴ科・リュウキュウアイ・

Strobilanthes cusia)とインド藍(マメ目・マメ科・インドアイ・*Indigofera suffruticosa*)を使用した沈殿方法の藍染めを行う。一度植えると二年間収穫できる琉球藍を使用する場合は比較的多い。琉球藍は7~8月に植え、翌年8~9月に収穫する。

藍泥作りは藍葉の収穫と同時に進行するが、収穫期初期に収穫された藍でライトブルーからブルーに染め、中期から後期に収穫された藍で濃紺に染める。タイ族の藍染めは同じ地域に住むモン族たちと手順が多少違っており、その違いは彼らの藍にまつわる信仰に基づいている。

馬の背ひと山程の藍葉を枝ごと収穫する。モン族から買った大きな木樽に石灰粉・藍葉と樽が浸るほどの水をいれて1~2日放置する。その間藍葉は繊維が壊れて発酵し、水に色素成分のインジガンが溶け出る。この段階では水は緑色に近い青い色をしており、シャボン玉



琉球藍

のような泡が表面に浮く。全ての藍の葉を絞って取り出した後、石灰の粉を加えてアルカリ化する。この石灰粉はこの村周辺に住む赤ザオ族から買ったもので、石灰岩を焼いて作ったものである。手桶で水を掬いながら空気を混ぜ込むように攪拌し続けると、藍液は黄色(アマガエル色)に変化し、表面には分厚い濃藍色の泡「藍の華」が浮かぶ。このとき発する「ぶつぶつ」という音と藍の華が潰れない硬さになることで、藍の状態を判断する。このまま3日間放置した後、表面に浮いた藍の花を掬い取り、全ての上澄み液を捨てる。底に沈んでいた藍泥と藍の華には藍の色素成分インジガンが凝縮して溜まっており、これらを合わせて別の桶に入れ保管する。この状態でほぼ半年間保管でき、秋から冬の間にかけてこの村の各家庭で藍染めが行われる。



藍建てには同じ木製樽に藍泥、水、灰汁、焼酎、さらに唐辛子とその葉、レモンの葉、ザボンの葉、ヨモギ、生姜の根と葉等を糸で縛ったものを入れ、よく攪拌した後3日ほど放置する。灰汁は台所のかまどから取った木灰で作ったもので、竹箆にビニールの袋を張ったものに乗せ、上から水を掛けて作る。灰はある程度保管すると、少ない灰でも足りるよう

になる。様々な草木を入れるのは、におい消しと色を鮮明にするためである。一回の藍建てで500gの藍泥を使用し、幅約38cmの木綿15mを濃紺に染めることができる。

樽の染め液の中に生地を入れる。染め液に空気が入ると藍が死ぬので、泡立えないように静かに入れていく。ザルと重石で生地が浮き上がるのを防ぐように、生地を漬け込む。そのまま40分放置する。生地を引き上げる時は少しずつ手繰るように引き上げ、適量ごとに絞る。生地が空気に触れて酸素と結合し酸化することで、生地は染め液から引き上げる端から青く発色していく。染め液の樽に渡した竹の板に置いていく事で余分な水分が樽に落ちる。そのまま軒先の日陰に干した後、川で洗濯する。通常彼らは黒に近い濃紺に仕上げるが、そのために染め・干す・洗うの工程を、一日二回一週間続ける。藍泥には多くの不純物が含まれており、これが発色を悪くしている。洗う工程を加えることで不純物が流れ去り、藍本来の色を取り戻す。一回建てた藍はそのまま藍泥と灰汁を足していくことで使い回しする。



タイ族は藍を酒飲みの男に例える。毎朝毎晩村で造られる米焼酎を飲み、発色が悪いときには酒を元気付けに与えると藍が復活し美しく染まるという。藍建てして3日経た後、表面に油のようなものが浮くのは藍が死んでいる証拠である。その場合藍泥に焼酎を混ぜると復活できることがある。また藍の木は木陰に植えるが、日差しが強いとこの男が疲れてしまうと考えている。実際強い日差しの下で育った木で染めると、色は黒くなるという。

タイ族にとって藍の色は空の色で、聖なる色として染めに関わる全てが清らかに保たれている。子供の衣装や嫁入り道具の寝具など、大切なものは全て藍色に染める。女性が生理の際には道具に触れる事も近づくこともできない。

あるときこの村の古い友人から娘の結婚式に呼ばれたことがある。タイ族の結婚式は三日三晩続くが、その間50羽の鶏、2匹の豚、山のような野菜が調理され、又村中の米焼酎が新郎新婦の各家に集まり、盛大に行われる。その最終日の早朝、新郎は新婦の家に新婦を迎えに来る。そのとき新郎は新婦の祖先を祭る祭壇に様々な捧げ物を持参する。その最後、新婦の母親に手渡されたのは濃藍に染められた一反の綿布だった。それは祭壇の中央におかれて、この結納品で埋まった色鮮やかな祭壇を完成した。いかにこの生地が、この民族にとって生活の中心にあり、大切なものかを的確に示しているものと考えられる。

INDIGO STORE HANDICRAFT PROJECT (C)

Duong thi Thanh (ズンティ・タイン)、吉澤岳史 共著、禁無断転記転用。

インディゴストア・ハンディクラフト・プロジェクト

ベトナムでは急激な経済発展や観光地化の影で、少数民族たちの貴重な伝統的文化遺産が消えていく運命にあります。インディゴストアは現在、ベトナム北部で様々な少数民族の衣装文化保護とそれに伴う生活向上のためのプロジェクトを行っています。バンホー村は当団体が1997年から当団体が調査活動を始め、伝統的手法による藍染や絞り染めの復活に成功。現在この村では藍染めが一つの産業にまで発展しました。藍染に従事する村人女性たちは、彼ら自身に備わった伝統的技術によって現金収入を継続的に得ることができます。

現在もベトナム北部にはこれら以外にも至急活動を始めるべき地域が多く存在しています。しかし高齢熟練者たちの死去が進むと、彼らの持つ技術は次世代に伝えられることも無く、永遠に失われてしまうこととなります。早急な活動開始が必要です。ご賛同いただける個人の方、または企業様を募集しています。

INDIGO STORE HANDICRAFT PROJECT (C)

178c Xuan Dieu, Tay Ho, Hanoi, Vietnam. Call: xx84 090 460 3933.
sapaindigojapan@yahoo.co.jp